

水稻新草状品種の栽植密度および移植時期の違いが収量におよぼす影響

安部秀雄・神前芳信・西村昭司郎・川北暁司

新草状品種(短稈穂数型)の増収栽培法を見出すため、主としてシラヌイを供試し、1967～68年に移植期、苗代日数、栽植密度試験を実施した。結果はつぎのようであった。

1. 多収栽培用品種は多肥条件下でも登熟歩合の落ちないことが必要であり、1穂当りの穎花数を増加さすより穂数の増加によって穎花数が確保できる品種がよい。
2. 早植(6月15日植)は晩植(6月25日植)に比較して多収を得たが、これは早生の品種においては登熟歩合が高いためであった。
シラヌイのように縞葉枯病に弱い品種は、6月25日の晩植で発病を軽減することができた。
3. 苗代日数はタマヨドのように早生品種は若苗(30日)が良かったが、シラヌイ、ミホニシキなどの晩生の品種は長い苗代日数(40～45日)が必要である。
4. 元肥重点施肥でのシラヌイは粗植(16株/m²)が多収を得たが、追肥重点施肥では密植(33株/m²)が多収を示し、ミホニシキはシラヌイと反対の傾向を示した。
5. 粗植(16株/m²)の場合は25cm株間に移植すると多収を得るのに適したが、株間が30～35cm程度と広い場合には密植(22～33株/m²)の方が多収を得た。